

「コンテナ苗の利用拡大の取組」



【コンテナ苗とは?】

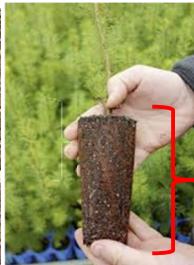
コンテナ苗(写真1)は、硬質樹脂製などの専用の容器(コンテナ)(写真2)で育苗された、根鉢付きの苗木です。林業先進地である北欧などで実用化され、北海道では平成23年頃に導入されました。

普通の苗(以下、裸苗という)は、芽の成長が休止する休眠期(春と秋)に植栽を行います。一方、コンテナ苗は根と土が一体化した状態(根鉢)で植栽できるため、通常の植栽適期以外でも高い活着率が見込めます。このことから、植栽適期(春や秋)の拡大が期待でき、伐採・地拵え・植栽を一貫して行う作業システム(※1)の導入が可能となります。さらに、専用の植栽器具(写真3)を使用できることから、植栽が容易で苗の取り扱いが簡単といった利点があります。

本トピックスでは、北海道森林管理局で進めてきたこれまでの取組と、今後の方針について紹介します。



写真1：コンテナ苗



根鉢



写真2：コンテナ容器



写真3：専用の植栽器具
(左:オーガ、右:スヘード)

【コンテナ苗の植栽方法】

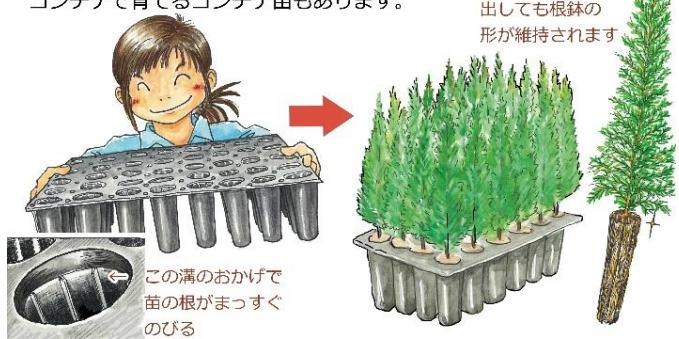
植栽は、主に以下の方法で行われています。

地拵え(植栽地の整備)後、専用の植栽器具を使い、根鉢上面と地表が一致する深さとなるように植穴をあけます。過湿地では少し地上に突き出るくらいの深さとします。その後、苗がまっすぐ立つように植え、乾燥が懸念される場合には、根鉢上面に軽く土をかけます。根鉢上面が地表より低くなる深植えは避けます。また、必要に応じて踏み固めを行います。

裸苗の場合は、苗木を植栽の現場に運んできたら一時的に植えておく作業(仮植)が必要ですが、コンテナ苗は根鉢があるため、この作業を省略することができます。

より効率的な苗木の生産と植付を目指し、コンテナで育てるコンテナ苗もあります。

コンテナから
出しても根鉢の
形が維持されます



【北海道森林管理局の取組】

1. コンテナ苗植栽本数の推移

北海道森林管理局では平成23年度から試験的にコンテナ苗を導入し、平成25年度には全道24箇所の森林管理（支）署に拡大しました。令和2年度には裸苗との割合が半々を超え、令和6年度には約7割となる1,388千本が植栽されています。（内訳：カラマツコンテナ苗689千本、クリーンラーチ（※2）コンテナ苗252千本、トドマツコンテナ苗420千本など）

2. 造林作業の軽労化に向けた取組

コンテナ苗は根鉢が付いているため、苗木の運搬に手間がかかるという課題があります。この対策として、令和7年度には、運搬と植栽を同時に進められる電動苗木運搬車（写真4）を試験的に使用した植栽を行いました。請負事業体からも「機械操作が簡単」「傾斜地での苗木運搬に便利」などの意見が寄せられています。（写真5）



写真4：電動苗木運搬車「斜楽」



写真5：植栽時の様子

3. コンテナ苗の普及活動

北海道森林管理局では「コンテナ苗」の考え方を定着・普及させるため、職員、国有林を請け負う林業事業体、並びに民有林担当者を対象に現地検討会を開催しています。コンテナ苗導入に向けた方針の伝達や意見交換を行い、普及に努めています。（写真6）



写真6：実施した現地検討会の様子

【今後の取組】

林業従事者の人手不足や高齢化が深刻化する中、従来の植栽作業は人力による裸苗の植栽が主体でした。しかし、コンテナ苗の導入により、植栽作業の機械化や効率化が可能となることが見込まれます。

例えば、伐採・地拵え・植栽を一貫して行う作業システムを構築するには、植栽時期を選ばないコンテナ苗の使用が不可欠です。

また、裸苗と比べて植栽が容易で、苗木運搬や植え付け能率向上が期待できるため、植栽作業に従事する業者の減少や高齢化が進む中、コンテナ苗は持続可能な林業に欠かせない存在となります。

北海道森林管理局では、今後も造林作業に従事する方々の効率化及び軽労化（作業の軽減）を推進するため、新たな技術の研究等に率先して取り組み、各関係機関と協力しながら情報共有を続けていく考えです。

用語の解説

※1 「一貫作業システム」

伐採から植栽までを一体的に行う作業システムのこととで、伐採時に使用した林業機械等を活用し、地拵えから植栽までの省力化・効率化を図ることによりコスト低減、工期の短縮が可能。

※2 「クリーンラーチ」

カラマツとグイマツをかけあわせて開発された特定苗木（特定母樹から採取された種穂から育成された苗木）。炭素を固定する能力が高い。